

戦時体制下のアジア仏教史

—金山正好著『東亜仏教史』をめぐって—

佐藤 裕亮*

はじめに

『東亜仏教史』は1942年12月、理想社より「印度・支那は勿論、広く南北共栄圏に及ぶ佛教史実を考究せる本邦最初の綜合佛教史¹」として刊行されたもので、2012年12月現在、明治大学図書館には、計二冊が所蔵されている²。

すでに筆者は、新アジア仏教史シリーズの一冊として刊行された『興隆・発展する仏教』の書評において、本書を『アジア仏教史』『新アジア仏教史』などの戦後に刊行されたアジア仏教史の先駆として取り上げたが³、本稿では『東亜仏教史』そのものに焦点をあて、内容構成や時代背景を中心に、周辺的な事柄なども含めて紹介していきたい。

1 『東亜仏教史』以前の仏教史

我が国で、仏教史の名を冠する書物が流布し始めたのは、1890年ごろのことである。1890年に刊行された『三国仏教略史』全3巻をはじめ⁴、藤井

*さとう・ゆうすけ／明治大学大学院文学研究科史学専攻博士後期課程3年

宣正『仏教小史』⁵、境野黄洋『印度仏教史綱』⁶、藺田宗恵『印度仏教史要』⁷、堀謙徳『印度仏教史』⁸、馬田行啓『印度仏教史』⁹、龍山章真『印度仏教史概説』¹⁰、同『印度仏教史』¹¹などのインド仏教史や、吉水智海『支那仏教史』¹²、境野黄洋『支那仏教史綱』¹³、橘恵勝『支那仏教思想史』¹⁴、伊藤義賢『支那仏教正史』¹⁵、宇井伯壽『支那仏教史』¹⁶に代表される中国仏教史、あるいは村上専精・境野哲・鷲尾順敬『大日本仏教史』¹⁷、村上専精『日本仏教史綱』¹⁸、境野黄洋『仏教史要』¹⁹、石原即聞『日本仏教史』²⁰、伊藤義賢『日本仏教通史』²¹などの日本仏教史がその一例として挙げられるが、これらはいずれもインド・中国・日本の三国のうち、いずれか一地域の仏教について述べたもので、『東亜仏教史』のように、複数の地域を横断的に論じようとした著作ではない。²²

明治から昭和初期にかけて刊行された仏教史の中に共通してみられるのは、凝然の『三国仏法伝通縁起』に代表される仏教の史的叙述の形、より具体的にいえば、仏教の創唱と伝播の過程に関する歴史叙述の枠組みとして、インド・中国・日本の三国仏教を核とした史的叙述の伝統であった。そこには、東アジアはもちろん中央・東南アジアにまで広まりをみせた仏教を、総体として捉えようとする視点はみられない。²³

2 三国仏教史観の克服を目指して

1930年代までに刊行された仏教史関係の著述のなかで、三国仏教という枠組みを超えて、アジアの各地域にまたがって仏教史を述べようとする試みは、ほとんどみられなかった。では『東亜仏教史』はどのようにその克服を目指したのか。本節では、内容・構成面の検証を通して、その一端を明らかにしていきたい。

本書は40章からなる。このうち仏教以前に相当する、第1章「仏教興起の由漸」を除いた39章を、第1期から第7期にまで区分した上で、まずそれぞれの時代の概観を示し、続いてインド文化圏、中国文化圏と順序を追い、各地の仏教の沿革を記したところに、構成上の特色が認められる。以下にその概要を示そう。

佛教以前

佛教興起の由漸（第 1 章）

第 1 期 550 B.C. ～ 186 B.C.

時代の概観、釈迦牟尼伝、初期の僧伽及び結集、阿育王時代の佛教（第 2 章～第 4 章）

第 2 期 185 B.C. ～ A.D.320.

時代の概観、案達羅・貴霜時代の佛教、部派佛教、大乘佛教并に中観派の勃興、後漢三国西晋時代の佛教の東漸（第 5 章～第 8 章）

第 3 期 A.D.321. ～ A.D.590.

時代の概観、笈多時代の印度・西域及び南海佛教、瑜伽派の興起と諸派の情勢、五胡諸族等と佛教、東晋の佛教、南北朝時代の南地佛教、南北朝時代の北地佛教、南北朝時代の教学（第 9 章～第 15 章）

第 4 期 A.D.591. ～ A.D.900.

時代の概観、印度教学の盛衰と密教の展開、印度及び南海佛教の情況、西藏佛教の勃興并に西域佛教の消長、隋唐二朝と教團、隋唐時代の譯業、長安の諸宗、隋唐の實踐宗、隋唐の佛教文化并に新羅の佛教（第 16 章～第 23 章）

第 5 期 A.D.901. ～ A.D.1260.

時代の概観、印度佛教の衰退と南海佛教の興隆、喇嘛教の発達、五代宋代の諸宗、五代宋代の佛典、五代宋代の教團、遼金二朝の佛教、高麗・西夏その他の佛教（第 24 章～第 30 章）

第 6 期 A.D.1261. ～ A.D.1650.

時代の概観、印度南海の佛教及び喇嘛教の推移、元明時代の諸宗、元代の教團、明代の教團、明代の雲南・朝鮮等の佛教（第 31 章～第 35 章）

第7期 A.D.1651.～現在

時代の概観、近世の印度及び南海佛教、近世の喇嘛教、清代以降の諸宗、清代以後の教團、近世の雲貴・朝鮮等の佛教（第36章～第40章）

本書が叙述の対象としているのは、日本を除いたアジア全域であるが、必ずしも諸地域の仏教事情が均等に述べられているわけではない。たとえば、第1期から第4期にかけてはインド・中国仏教が記述の大部分を占め、第5期以降になるとチベットやモンゴル、朝鮮、南海諸国の仏教について一定の紙数が費やされている。こうした叙述のムラは、主として史料の偏在に因るものと考えられるが、それでも可能な限りインド・中国以外の事情について盛り込んで、広い地域を一つの編年のもとに叙述しようとしたことは、従来の仏教史にはあまりみられなかった傾向であり、注目される。

本書が、国や地域を跨いで広くアジアの仏教を、編年のもとに素描することによって、従来の仏教史に色濃くみられた三国仏教史観からの脱却を図ろうとしたことは、構成の上からも読み取れるが、そうした金山の立場がより鮮明にあらわれているのが、「序説」にみえる以下のような記述である。

古来、本邦に於ては佛教伝播の地域的画期に関し、印度・支那・日本の三国を数へる習慣がある。鎌倉末期の東大寺凝然が『三国佛法伝通縁起』三巻を撰して、この三国の佛教諸宗の沿革等を叙述してゐる如きはその著例であり、この分割法は現今もお踏襲され、佛教史は一般に印度佛教史・支那佛教史・日本佛教史の三種に大別されてゐる。これ佛教史の中核をなす部分を擇出したものとして妥当である。しかし精しくいへば、この三地域以外にも、印度の文化圏に属し、或いは嘗て属した鈴蘭 (Ceylon)・ネパール (Nepal)・緬甸 (Burma)・泰 (Thai)・馬來 (Malay)・柬埔寨 (Cambodia)・スマトラ (Sumatra)・瓜哇 (Java)・西藏 (Tibet)・ブータン (Butan)・トルキスタン (Turkestan) の大部分等、及び支那の文化圏に属する朝鮮・満州・蒙古・安南・台湾等にも、佛教流伝の史実は多々あるのであるから、佛教史としては、それ等各地の史実をも看過することは出来ない。²⁴

ここで金山は、三国仏教史観に基づく仏教史の有用性を認めつつも、セイロンやネパール、ミャンマー（ビルマ）、タイ、マレーシア、カンボジア、スマトラ、ジャワ、チベット、ブータン、トルキスタン、朝鮮半島、満州、モンゴル、ベトナム、台湾といった地域における仏教の流伝について、言及する必要があることを述べている。これらはいずれも、従来の枠組みの中では把握しにくかった地域であり、不十分ではあるにせよ『東亜仏教史』が、一つの編年のもとにアジアにおける仏教全体を素描しようとしたことは、それまでの仏教史のあり方を問い直したものとして、評価されるべきであろう。

3 1940年代初頭の出版統制と『東亜仏教史』

1940年の近衛新体制運動以降、日本の新聞社や出版社をめぐる環境は大きく変化した。従来からの出版社・取次・書店の三者によって構成されてきた出版界に、内務省、情報局、商工省などの政府当局が介入し、その指導監督の下に各種出版統制団体が設置され、日本出版文化協会による用紙割当量の査定や、政府当局の主導による出版社・雑誌の整理統合、日本出版配給株式会社の設立による取次の一元化などの措置がとられていく²⁵。出版界が厳しい統制のもとに組み入れられる中で、仏教書の刊行にも、同様に厳しい制限が加えられていったであろうことは、想像に難くない。

1942年当時、出版社は書籍の出版に際して、日本出版文化協会に企画書を提出し、発行の承認を受け用紙の配給を受ける必要があった。金山とともに、望月信亨の『仏教大辞典』編纂に携わった佐々木隆彦が、『恩師望月信亨先生』に寄せた文章の中で以下のように述べているのは、そうした事情をよく物語る。

開戦の翌年、金山さんの処女出版『東亜仏教史』が先生の序文を付して理想社から刊行された。当時、陸軍は東南アジアを席捲したが、海軍はミッドウェー、ソロモン海戦等で敗れ、本土も初めて空襲を受けるといふ超非常時の年であった。出版会も一般物資とともに用紙の不足により書籍発行の企画審査がにわかに強化せられ、発行承認制が採用され

たが、『東亜仏教史』は仏教の信仰を通して東亜共栄圏に資するものと認められ、初版二千部（菊判布装函入五〇九頁・停止価格金五円八十銭）の用紙の配給を受けたことはまことに思い出深い出版であった²⁶。

戦時体制下における出版統制の動きは、多くの出版物の刊行を抑制する一方で、満蒙支那台湾南洋といった、大東亜共栄圏に含まれる諸地域に関する書物の刊行を促進する方向にも働いた。「支那仏教史学」誌上に『東亜仏教史』の書評を執筆した梅崎諦道の「新刊「東亜仏教史」も書店でその表題のみを見た人は、東亜関係の歴史書がまた一冊増えたとしか思はないかも知れない²⁷」という言葉からは、そのような状況の一端をうかがうことができる。

1930年代後半から1940年代初頭にかけて提唱された「東亜新秩序」「大東亜共栄圏」構想や太平洋戦争の勃発は、モンゴルや南洋諸国の仏教事情に関する著作が公刊される下地となった。橋本光實『蒙古の喇嘛教』²⁸、チャールズ・ベル著、橋本光實訳『西藏の喇嘛教』²⁹、佐藤致孝『泰国の仏教事情』³⁰、大日本仏教会編『南方宗教事情とその諸問題』³¹、龍山章真『南方の仏教』³²、龍山章真『南方仏教の様態』³³、長井真琴『南方共栄圏の仏教』³⁴、中島莞爾『南方共栄圏の仏教事情』³⁵、仏教研究会編『南方圏の宗教』³⁶、オー・エイチ・ムーサム著、南満州鉄道株式会社東亜経済調査局訳『ビルマ仏教徒と慣習法』³⁷、久野芳隆『南方民族と宗教文化』³⁸、東京帝国大学仏教青年会編『大東亜の民族と宗教』³⁹、棚瀬襄爾『東亜の民族と宗教』⁴⁰などは、その一例として挙げられる。

より象徴的なのは、1943年ごろから文部省によって刊行された、二冊の小冊子であろう。文部省教学局が「大東亜建設に於いて宗教の占むる地位の重要なるに鑑み、宗教教師その他國民一般をして大東亜諸地域に於ける宗教文化の實相を理解せしむる⁴¹」ことを目的として刊行した「宗教文化叢書」がそれで、1943年には、大東亜における宗教事情を概観した、古野清人『大東亜の宗教文化』⁴²が、1944年には、インド、マレーシア、セイロン、ビルマ、タイ、カンボジア、ベトナム、中国、満州、チベット、モンゴルの佛教について概観しつつ、大東亜共栄圏の建設における仏教の意義について論じた、高楠順次郎『大東亜に於ける仏教文化の全貌』⁴³が、それぞれ刊行され

ている。

当時、満蒙支および南洋諸島の仏教・宗教に関する一般的知識は、「大東亜ニ於ケル指導的国民タルノ資質」⁴⁴の錬成に寄与するものとして、期待されていた。『東亜仏教史』が「仏教の信仰を通して東亜共栄圏に資するもの」と認められ、刊行が許可された背景には、こうした時代特有の事情が伏在していたのである。

4 『仏教大年表』から『東亜仏教史』へ

当時の研究者には、大東亜共栄圏建設戦争完遂のための使命分担者として、学問報国に邁進することが求められていた。日本の南進によって、新たに共栄圏に加わった南方諸地域を包含する、大東亜の仏教史を記した金山の『東亜仏教史』は、まさに時局にかなう出版物であったといえるだろう。だが、実際に『東亜仏教史』の内容をひもといていくと、共栄圏建設への賛辞や、時局を意識した文言が乏しいことに気づく。研究者として、あるいは教育者としての金山が、時局に無関心であったとは思われないが、⁴⁵この事実は、そうした外的要因に頼って評価を定めてしまうことの危険性を、示唆しているように思われる。

そこで本節では、著者の金山正好の生涯を追い、彼の学問形成に大きな影響を与えた師の望月信亨とその編纂事業に触れながら、『東亜仏教史』成立の背景を考察することで、本書成立の内的要因に迫っていくことにしたい。

金山正好の生涯については「武蔵野」「多摩郷土史研究」誌上に掲載された追悼文と⁴⁶、『恩師望月信亨先生』に寄せた自身の回顧によって、⁴⁷うかがうことができる。

金山正好は、1905年6月28日東京下谷の日蓮宗養伝寺に、秋山見善の次男として生まれた。谷中尋常小学校、天台宗中学校を経て大正大学に学び、1930年に同大学仏教学科を卒業すると『梵和大辞典』や『仏教大辞典』の編纂に従事し、『仏教大辞典』全7巻刊行後の1937年4月からは大正大学講師を勤めている。⁴⁸

1944年3月、大学を離れた金山は、科学動員協会囑託、課長代理（1944

年9月～1946年2月)、藤嶺学園教諭(1946年4月～7月)、東京大学法学部嘱託(1946年7月～1949年3月)などの職を経て、1949年からは東京都教育庁嘱託(のち主事)となり、長く文化財行政に携わった。『社寺とその美術』⁴⁹、『中央区史跡散歩』⁵⁰の執筆や、『伊豆諸島巡見記録集』⁵¹、『南汎録』⁵²の校訂といった郷土史関係の業績は、この頃に培われた成果として知られる。

郷土資料の調査研究に従事する一方で、金山は、辞典や目録の編纂に裏方として尽力し、仏教学の発展に多大な貢献を成している。この方面の仕事としては、望月信亨『仏教大辞典』、荻原雲来『梵和大辞典』、中村元監修『新・仏教辞典』⁵³の編纂や『増上寺史料集』の別巻に収録された「増上寺三大蔵経目録」の編纂校閲⁵⁴、田久保周誉『梵字悉曇』への補筆⁵⁵などが知られるが、とりわけ望月信亨の『仏教大辞典』編纂・増訂に長年従事していたことは、金山自身の学問形成や『東亜仏教史』との関わりからも、注目される⁵⁶。

金山自身の回顧よれば、望月の自宅で最初に携わった仕事は『仏教大年表』の増補であった⁵⁷。『仏教大年表』は当初『仏教大辞典』の付録として企画され、1909年12月に武揚堂から刊行されているが、望月が還暦を迎えるのにあわせて同書の増補改訂が計画され、1930年9月に望月博士還暦記念会から出版されており、その「再版刊行趣旨」には金山の名前もみえる⁵⁸。

『仏教大年表』増補改訂版刊行の翌年、望月信亨は精興社印刷所と契約を結び、『仏教大辞典』第1巻の組版にとりかかる。1931年11月から1936年12月にかけて、第1巻から第5巻までの各巻と別冊索引が刊行され、1937年6月には『仏教大年表』に昭和6年から11年までの記事を加筆したものを『仏教大辞典』第7巻として編入、ここに全7巻の完結をみた⁵⁹。その翌年、金山は大正大学の講師となり、母校の教壇に立つこととなる。

『東亜仏教史』に結実する金山の講義が、望月のもとで従事した『仏教大年表』や『仏教大辞典』の編纂に裏打ちされたものであったことは、こうした経緯からみれば、容易に想像される。とくに望月の『仏教大年表』が、「釈尊の降誕から明治四十二年に至る二千四百七十四年間の佛教に関する事実を能ふだけ蒐集網羅」⁶⁰を目指し、上段に日本、中段に中国、下段にインドをはじめ、セイロン、ベトナム、ビルマ、西域諸国、チベット、モンゴル、

朝鮮ならびに欧米各国の記載を併記し一覧できるようにした年表であったことは、注目されよう。対象となる地域の広さや時間の長さ、一つの編年に基づく仏教史の提示といった特色は、金山の『東亜仏教史』とも共通するものであった。

金山が教壇に立ち、その講案をまとめた1940年代という時代において、アジアの仏教史や宗教のありようを語ることが、世間や大学教育の場において求められていたことは確かである。だが、広くアジアの仏教を一つの編年のもとに述べようとする試みそのものは、すでに1900年代初頭の段階で、望月信亨『仏教大年表』の中で模索されていた。この点からみれば、金山の『東亜仏教史』は、『仏教大年表』の延長線上に位置づけられるべき存在であると評価することもできる。

おわりに

日本で最初のアジア仏教史は、明治初年から続く仏教学の一大編纂事業のうちに培われ、「大東亜共栄圏」の建設が叫ばれる戦時体制の下に生まれた、希有な仏教史であった。テーマ別・地域別に語られがちであった仏教を一つの編年のもとに略述し、仏教史全体を素描するなかで、従来の三国仏教史観からの脱却を図りあらたな仏教史的叙述の可能性を切り開いたことは、研究史上一定の意義を認めることができる。

一方で、こうした全仏教史的叙述の可能性そのものに対する疑問も、その刊行当初から指摘されていた。たとえば、『東亜仏教史』の書評を執筆した梅崎は、以下のように述べている。

併し乍ら本書の叙述が綜合佛敎史として、どこまで成功してゐるかどう
うか、それはまた別の問題である。印度、支那、日本或は南海の佛敎
は夫々様態を全く異にしてゐる。佛敎美術の如きも印度、支那及び日
本と異れる経路を通つて発達してゐる。従つて同じく佛敎史と云つて
も夫々取扱ひ方が異つてくる筈である。性格の異れる各佛敎史を有機
的に綜合することには幾多の困難がともなふであらう。つきつめて考
えれば嚴密な意味の綜合佛敎史は、その成立の可能さへ疑はしくなつ

てくるのである。

たった 500 頁程度の叙述をもって、仏教の興起から現在までの仏教全体を体系的に明らかにすること自体がそもそも可能なのか、という指摘は、『東亜仏教史』のもつ構造的な問題を鋭く衝いている。年表のように各地域の仏教を、編年に沿って配列するだけでは平板な叙述になりがちで、各地域の仏教の特色について十分に論じることはできない。けれども、戦後に刊行されたアジア仏教史の多くがそうであったように、地域別に論じていこうとすれば、それぞれの仏教史を有機的に結びつけることは、より困難になる。

現在のところ、「はたして厳密な意味での総合佛教史は成立しうるのか」という問いに、戦後のアジア仏教史は、十分に応えることができていない。東アジアにおける仏教の展開をどう叙述していくべきなのか。今もなお、本書は書庫の片隅で、読者に問いかけ続けている。

-
- 1 『朝日新聞』東京版、1942年12月11日朝刊、広告欄に「本書は印度・支那は勿論、広く南北共栄圏に及ぶ佛敎史実を考究せる本邦最初の総合佛敎史である」と記されている。
 - 2 明治大学図書館には、中央図書館本（請求番号 180.22/3//H、受入印は昭和 18 年 2 月 13 日）と和泉図書館本（請求番号 180/59//W、見返しに蒙古研究所の蔵書印あり。受入印は昭和 25 年 10 月 12 日）の二冊が架蔵されている。
 - 3 拙稿「書評『興隆・発展する仏教』新アジア仏教史、中国Ⅱ・隋唐」（『仏敎史学研究』54 巻 2 号、2012 年 3 月）。
 - 4 島地黙雷・織田得能『三国仏敎略史』全 3 巻（鴻盟社、1890 年）。
 - 5 藤井宣正『仏敎小史』全 2 巻（大谷津逮堂、1894～1895 年）。
 - 6 境野黄洋『印度仏敎史綱』（森江書店、1905 年）。
 - 7 園田宗恵『印度仏敎史要』（龍谷学会、1913 年）。
 - 8 堀謙徳『印度仏敎史』（前川文栄閣、1915 年）。
 - 9 馬田行啓『印度仏敎史』（早稲田大学出版部、1917 年）。
 - 10 龍山章真『印度仏敎史概説』法蔵文庫（法蔵館、1938 年）。
 - 11 龍山章真『印度仏敎史』（法蔵館、1944 年）。
 - 12 吉水智海著、望月信亨校『支那仏敎史』（金尾文淵堂、1906 年）。
 - 13 境野黄洋『支那仏敎史綱』（森江書店、1907 年）。
 - 14 橘恵勝『支那仏敎思想史』（大同館、1921 年）。

- 15 伊藤義賢『支那仏教正史』上 (竹下学寮出版部、1923年)。
- 16 宇井伯壽『支那仏教史』(岩波書店、1936年)。
- 17 村上專精・境野哲・鷲尾順敬『大日本仏教史』(溯源館、1897年)。
- 18 村上專精『日本仏教史綱』上・下 (金港堂書籍、1898～1899年)。
- 19 境野黄洋『仏教史要』日本之部 (鴻盟社、1901年)。
- 20 石原即聞『日本仏教史』帝国百科全書118編 (博文館、1904年)。
- 21 伊藤義賢『日本仏教通史』(興教書院、1910年)。
- 22 なかには、伊藤義賢『印度支那仏教通史』(顯道書院、1910年)のように、インド・中国仏教史に朝鮮仏教史を付録させたものも刊行されているが、「三国仏教」という枠組みから大きく逸脱するものではない。
- 23 日本中世における三国仏教史観については、高木豊「鎌倉仏教における歴史の構想」(『鎌倉仏教史研究』岩波書店、1982年)、市川浩史『日本中世の歴史意識—三国・末法・日本—』(法蔵館、2005年)などの専論がある。
- 24 金山正好『東亜仏教史』(理想社、1942年)。
- 25 吉田則昭「戦時期メディア界再編成の理論と実際(2) —出版新体制—」(『戦時統制とジャーナリズム—1940年代メディア史—』昭和堂、2010年)を参照。1940年代の出版事情については、他に、荘司徳太郎・清水文吉編著『資料年表 日記時代史—現代出版流通の原点—』(出版ニュース社、1980年)、清水文吉『本は流れる—出版流通機構の成立史—』(日本エディタースクール出版部、1991年)、桜本富雄『本が弾丸だったころ—戦時下の出版事情—』(青木書店、1996年)などの研究がある。
- 26 佐々木隆彦「若き日の思い出の記」(望月先生三十三回忌追悼会編『恩師望月信亨先生』、山喜房仏書林、1980年)。
- 27 梅崎謙道「書評 金山正好著『東亜仏教史』」(『支那仏教史学』6巻3号、1943年4月)は、その書評の冒頭で以下のように述べている。
大東亜戦争開始以来、学徒はもとより一般人士の東亜に対する関心の高まり来れるは喜ぶべき現象である。この傾向を助長するかの如く近時の刊行物には東亜関係のものが断然多く、それ等が書肆の店頭にあふれてゐる。そして中には良心的ないゝ書物もあるが、どうかと思はれるものもないではない。新刊『東亜佛教史』も書店でその表題のみを見た人は、東亜関係の歴史書がまた一冊増えたと思はれないかも知れない。併しこの書はそんなに簡単に看過されるべき性質のものではない。
- 28 橋本光宝『蒙古の喇嘛教』(仏教公論社、1942年)。
- 29 チャールズ・ベル著、橋本光宝訳『西藏の喇嘛教』(法蔵館、1942年)。
- 30 佐藤致孝『泰国の仏教事情』(会通社、1942年)。
- 31 大日本仏教会編『南方宗教事情とその諸問題』(東京開成館、1942年)。大日本仏教会については、大澤広嗣「財団法人大日本仏教界の南方対策」(『宗教研究』82巻4号、2009年3月)、同「仏教学者と南方進出一大日本仏教界の仏印派遣」(『季刊日本思想史』75号、2009年12月)を参照。
- 32 龍山章真『南方の佛教』東亜仏教圏冊子1 (大谷出版協会、1942年)。
- 33 龍山章真『南方仏教の様態』(弘文堂書房、1942年)。なお、本書に対する書評として執筆された、大平善悟「南方仏教の文献—龍山章真『南方仏教の様態』その他—」(『一橋論叢』11巻5号、1943年5月)は、当時刊行された他の南方仏教に関する文献を紹介しており、

参考になる。

- 34 長井真琴『南方共栄圏の仏教』日本佛教讚仰会叢書（前野書店、1942年）。
- 35 中島莞爾『南方共栄圏の仏教事情』（甲子社書房、1942年）。
- 36 仏教研究会編『南方圏の宗教』（大東出版社、1942年）。
- 37 オー・エイチ・ムーサム著、満鉄東亜経済調査局訳『ビルマ仏教徒と慣習法』（満鉄東亜経済調査局、1942年）。
- 38 久野芳隆『南方民族と宗教文化』（第一出版協会、1943年）。なお、戦前日本における久野芳隆の研究活動については、大澤広嗣「昭和前期の宗教学人類学と調査研究機関—久野芳隆の場合—」（『アジア文化研究所研究年報』40号、2006年3月）、同「戦前日本の調査研究機関と宗教学人類学—久野芳隆の場合—」（『宗教研究』79巻4号、2006年3月）に詳しい。
- 39 東京帝国大学仏教青年会編『大東亜の民族と宗教』（日本青年教育会出版部、1943年）。
- 40 棚瀬襄爾『東亜の民族と宗教』（河出書房、1944年）。
- 41 この文言は、古野清人『大東亜の宗教文化』（文部省教学局宗教課、1943年）の冒頭に掲げられた叢書刊行の趣旨説明にみえる。
- 42 注41 前掲書。
- 43 高楠順次郎『大東亜に於ける仏教文化の全貌』（文部省教学局宗教課、1944年）。
- 44 この文言は、1942年2月に設置された大東亜建設審議会で、「大東亜建設ニ処スル文教政策」を取り扱った第二部会が5月21日に出した、答申正文の第一項目「基本方針」にみられるものである。企画院「大東亜建設基本方策（大東亜建設審議会答申）」（『大東亜建設審議会関係史料』第1巻、南方軍政関係史料23、龍溪書舎、1995年）を参照。
- 45 1942年、大正大学教授の職を辞した望月信亨は、黒谷に望月仏教文化研究所を設置し、大正大学出身者を中心に東京・京都の若手研究者を集め、仏教研究の振興を図っている。「仏教文化研究所彙報」（『仏教文化研究』1号、法蔵館、1944年）によれば、本研究所は東京之部と京都之部の二部からなり、それぞれ春秋二季に研究発表会を開催、金山正好は東京之部の主事としてこれに参加し、自身の研究課題として「南海仏教参考書の翻訳并に支那文献の収集」を掲げ、1942年から1943年にかけて「南方仏教事情」「泗州菩薩僧伽和尚」などの報告行っている。南海仏教へ向けられた関心は、大東亜諸地域における宗教事情を明らかにしようとする当時の仏教研究の流れに沿うものであり、彼がかならずしも時局に無関心ではなかったことが、こうした動向からもうかがえる。
- 46 前島康彦「金山正好さんを悼む」（『武蔵野』64巻2号、1986年5月）、米光秀雄「追悼金山正好先生」（『多摩郷土研究』60号、1986年8月）。
- 47 金山正好「恩師追懐」（望月先生三十三回忌追悼会編『恩師望月信亨先生』、山喜房仏書林、1980年）。
- 48 金山が講師を務めていた頃の大正大学では、戦時体制下における組織変更がたびたび行われていたことに留意しておく必要がある。1939年に「皇道翼賛の仏教の理論及び實際を研究し以て皇国仏教の進展に資するを目的」とした皇道仏教研究所が、1942年には「東亜共栄圏指導者養成」を目的とした東亜学科が、それぞれ設置されている。金山がこうした動きにどの程度関与していたかは定かではないが、東亜学科には、東亜学概説、仏教東亜学、東亜民族学、東亜哲学及哲学史、東亜宗教学及宗教史、東亜語（マレー語、タイ語、ヒンドゥスターニー語）などの科目が設置されていることからみても、彼の『東亜仏教史』が、この時代に求められていた大学教育のあり方と即応するものであったこ

とが、理解されよう。大正大学五十年史編纂委員会編『大正大学五十年略史』（大正大学五十年史編纂委員会、1976年）を参照。東亜学科の新設に伴う学則の変更については第2章「学則の沿革」を、戦時体制下における大正大学全般については、第3章「戦時中の大正大学」に詳しい。

- 49 金山正好『社寺とその美術』東京都瑞穂町文化財調査報告3（東京都西多摩郡瑞穂町、1974年）。
- 50 金山正好『中央区史跡散歩』東京史跡ガイド2（学生社、1979年）。
- 51 金山正好編・校訂『伊豆諸島巡見記録集』（緑地社、1976年）。
- 52 羽倉簡堂著、金山正好校訂、訳、解説『南汎録』（緑地社、1984年）。
- 53 中村元監修、石田瑞麿ほか編『新・仏教辞典』（誠信書房、1962年）。
- 54 増上寺史料編纂所『増上寺史料集』別巻（増上寺、1981年）。
- 55 田久保周誉著、金山正好補筆『梵字悉曇』（平河出版社、1981年）。
- 56 金山自身が、金山正好・香月乗光編『望無雲遺芳』（望月博士記念会、1950年）、望月先生三十三回忌追悼会編『恩師望月信亨先生』（山喜房仏書林、1980年）の編纂や、金山正好「近代構想素描 望月信亨」（『日本仏教史学』16号、1981年2月）の執筆などを通じて、望月信亨の業績を顕彰していることから、両者の密接な師弟関係がうかがえる。
- 57 注47前掲文。
- 58 望月博士還暦記念会「再版刊行趣旨」（『望月仏教大辞典』第6巻、増訂版、世界聖典刊行会、1955年）。
- 59 辞典刊行までの経緯については、注56前掲書のほか、常光浩然「望月信亨」（『明治の仏教者』下、春秋社、1969年）、阿川文正「浄土宗学の近代化—望月信亨博士の業績とその思想—」（『仏教近代化の諸相—伝統とその再評価—』大正大学学術研究助成委員会、1999年）を参照。
- 60 「凡例」（『望月仏教大辞典』第6巻、増訂版、世界聖典刊行会、1955年）。